

映画・本・歴史のこと

<第9回> 松本清張と戦後



有田誠(ありたまこと)京丹波町在住の映画愛好家。写真は、中国黒龍江省平房の関東軍 731 部隊跡。2千体とも言われる生体実験の死体を焼却処分した煙突。2008 年筆者撮影。



『ゼロの焦点』の久我美子(1931~)

『ゼロの焦点』(一九六一)

二十一時十五分発急行「北陸」で、夫(南原宏二)憲一を妻(久我美子)の禎子が捜しに行く上野駅から映画は始まる。夜が明け、冬の日本海沿いを走る列車にタイトルがかぶさる。

川又昂の白黒撮影がすばらしい。

脚本は橋本忍と山田洋次。これだけ込み入った清張の原作(一九五八)を九十分分にまとめる手腕は、まさにプロの仕事である。広告会社金沢支店に赴

任中の夫は、かつて立川米軍基地周辺を担当する風紀係の巡査だった。売春婦たち(「パンパン」はもはや死語)を取り締まる中で、能登出身の久子(有馬稲子)と知りあう。彼女の故郷高浜(現志賀原発の近く)で、憲一は別名で夫婦として、二重生活を送っていた。

もう一人、佐知子(高千穂ひづる)も、同じ立川の過去をもっていた。彼女は耐火レンガ会社を経営する社長(加藤嘉)夫人となり、今や金沢の名士である。売春婦の過去が明るみに出ることを恐れ、佐知子は次々と殺人を犯していく。禎子が調べるうちに、こうした経緯が浮かびあがる。佐知子は、『砂の器』(一九六二)の作曲家和賀英良に

通じるものがある。青木富美子の労作『731』(二〇〇五新潮文庫)によれば、満州で関東軍の細菌戦部隊を率いた石井四郎は、GHQに取り入り戦犯を免れた。新宿若松町の自宅を、米軍専用の「パンパン宿」にしていたことを、複数の地元住民から取材している。『ゼロの焦点』の原作では、憲一は敗戦後二年間、中国に抑留されたとある。

上野駅

鉄道駅は、ほとんどが通過式である。しかし、上野駅は頭端式である。一九三二年(満州帝国建国)に竣工した。頭端式と言うのは、長崎駅や山陰線京都駅ホームのように、線路が行き止まりになる。東北本線と常磐線の、いかにも終着駅の雰囲気漂う。

この数年で、上野を舞台にした小説が二作ある。中島京子の『夢見る帝国図書館』(二〇一九文春)と柳美里の『JR上野駅公園口』(二〇一四河出文庫)である。

前者は、現国会図書館となった上野公園内の帝国図書館と戦災児や男に支配さ

れてきた女の人生を、交互

に語った作品。後者は、福島県の浜通り(福島第一原発の辺り)から、出稼ぎで上京し、ホームレスとなった男の生涯をたどる。

過去を次々と消し去る上っ面だけでペラペラの日本で、上野駅周辺は今なお、時間が重層的に蠢いている。

野村芳太郎

清張ものを九本撮っている。父は野村芳亭、松竹鎌田撮影所の所長を務めた。所内の社宅に住み、映画の世

界で育った。

祖父芳園は、京都寺町三条で芝居の背景や看板作り、都をどりの背景を独占到に制作していた。江戸の浮世絵師歌川国芳の流れをくむ。芳太郎の芳の字の所以である。

大船撮影所の助監督部に入るが、ビルマ戦争に補充将校として送られる。インパール作戦を奇跡的に生き残った。

かまわず、水準以上に仕上げられる。七十年代には『男はつらいよ』の添え物で、コント55号やハナ肇の喜劇をこなしながら、『砂の器』(一九七四)も撮っていたのである。当時は同姓同名の監督

がいると思っていた。「ボクの脳ミソには仕切りがあるから」とは本人の言。

三人の女優



有馬稲子(1932~)

有馬稲子は大阪池田の生まれ。父がコミュニストで官憲に追われ、府内を逃げまわっていた。四歳のとき、祖母が見かねて、朝鮮釜山の父の実姉夫婦に預けられ、そのまま養女となった。

釜山高等女学校に入るが、敗戦となる。漁船で密航して、日本に引揚げる。養母は藤間流の名取で、かつて宝塚に所属していた。芸名は有馬稲子だった。本人は望まないまま、歌劇団

の方針で二代目有馬稲子となる。

なお、とら屋の三代目おいちゃん、下條正己が生まれも育ちも釜山で、鉄工所の家業に従事していた。

久我美子は、宮中で琴を司る久我家四十二代目当主を父にもつ。斜陽貴族として、就職するなら好きな道をと、映画界に入る。三船敏郎は同期。

ゴジラを退治する芦沢博士を演じた平田昭彦が夫。平田は朝鮮京城(現ソウル)の生まれ、東大卒。五十七歳で早逝した。

高千穂ひづるは、神戸生



高千穂ひづる(1930~2016)

床の間で壁に向かって正座して息絶えるのが、何とも滑稽で哀れであった。殺され方のうまい役者であった。

最後に、憲一の死を不審に思い、佐知子を追いつめる兄役の西村晃もうまさぎる。青酸カリ入りのウイスキーで殺される場面、火鉢の灰が舞い上がって悶絶死する。『新仁義なき戦い組長の首』(一九七五深作欣二)では、山崎努に射殺される。